

シナ如来蔵思想

小川弘貫

如浄語録、続語録等によつて、如浄禪師にみらるる如来蔵思想、仏性思想を概観してみたいと思う。如来蔵思想は周知の如く、如来性を煩惱の黒雲でつつむ如来蔵と如来性をつつんでいる煩惱蔵とこの煩惱蔵を断じて如来蔵の如来性を顕現する断道とこの三つのものから成立つていゝものである。而してこの如来蔵と仏性とを比べてみると仏性が成仏の因果的な考えであるのに対して如来蔵は如来性の隠頭の考えが主である。ところで如浄禪師にみらるる如来蔵を予め結論的に云えば、禪師には如来蔵、煩惱蔵等の用語による一般の意味の如来蔵は見出されない。只如来蔵性のものや煩惱蔵性のものによる如来蔵思想は見出すことが出来るといえる。次に仏性思想であるが、如浄禪師にみらるるものは極めて僅かである。後で述べる通り、時節因縁仏性義や趙州狗子仏性無の語等にすぎない。如浄禪師にみらるる如来蔵思想、仏性思想は概括的に以上の如きものであるが以下順を追つて之を概観したいと思う。

一

まず如来蔵思想関係のものであるが、如来蔵の如来性的のものをみれば、

- 一、諸方道旧至上堂、大道無門、諸方頂額上跳出、虚空絶路、清凉鼻孔裡入来、恁麼相見、瞿曇賊種、臨濟禍胎。
- 二、謝縁西堂上堂、梅花清曉香、爛漫而借功、柳線早春濃、日暄而転位、哆哆和和兮、主賓妙叶、跛跛擊擊兮、偏正全該。
- 三、無賓主話勘破趙州、雖然、擬掃暖処、箭過鞮韃。
- 四、歳朝上堂、天得一以清、元正啓祚、地得一以寧、万物咸新。
- 五、仏祖同根、寂然不動、乾坤合徳、感而遂通。
- 六、談玄説妙太無端、切忌拈花自熱瞞。
- 七、秋風清秋月明、大地山河露眼睛。
- 八、一人発真帰源、乞兒打破飯碗。

九、心中宝珠。

等がみらるるが、一、の大道無門、虚空絶路の大道、虚空等は如来蔵の如来性的のものを表わすものであろうし、賊種、禍胎等は法見、法縛としての煩惱性を表わすものであろう。

二、の梅花、柳線や主賓妙叶、偏正全該等は如来性を意味するものと思われし、三、の無賓主、四、の天得一、地得一の一等も亦如来性的の意味のものであろう。五、の仏祖同根寂然不動、乾坤合徳感而遂通は全体として如来性の動きといえよう。六、の玄妙は如来性、熱瞞はさきと同じ意味での煩惱性、七、の秋風、秋月、眼睛等みな如来性とみることが出来るであろう。八、の真、源も亦如来性を表わすものである。以上は如浄語録に見らるる如来蔵思想的のものであるが、九、の心中宝珠は統語録にみらるるものである。この宝珠の如来性的の喩説は如来蔵説の場合にはよくみらるるものであるからこれらは一般的意味の如来蔵思想を表現するものといえる。以上は如来蔵の如来性を主としたものと見ることが出来るし、その如来性を禪的用語を用いて表現したものとみられる。次に如来蔵に對する煩惱蔵、或は煩惱蔵性のものをみるに、

一、指仏殿、開殿見仏、眼中毒刺、咄拔却刺、礼拝焼香、顛倒鈍置。

二、請首座上堂、拔断毒蛇尾巴、穿住黑牛鼻孔虚空背上索

来、大地六番震動。

三、指山門、不會動步上天台、金鎖玄関尽豁開。

等がみらるるが一、に於ては開殿見仏、礼拝焼香を眼中毒刺、顛倒鈍置として一般からいえば開殿見仏、礼拝焼香というが如き宗教的に尊いものを仏見法見、仏縛法縛の立場から眼中毒刺、顛倒鈍置として煩惱性のものとして之を退けるのである。二、は請首座の法語であるがその中の毒蛇尾巴の如きは煩惱蔵性のものである。ここでは断道も一寸現れて拔断の語句等もみられる。三、もよく出てくる言葉であるが金鎖玄関等煩惱性のものとしてみるべきものであろうし従つて豁開の断道も出るわけである。以上の如く開殿見仏礼拝焼香や金鎖玄関等仏教の究極の立場に立つてその未至のものや残滓の如きものは、般若仏教に於て蘊処界の三科も十二因縁も四諦もその他一切仏縛法縛として空無さるる如く、煩惱性のものとして断ぜられるのである。次に煩惱蔵を断じて如来蔵の如来性を顕現するものとして左の如き種々がある。

一、開炉上堂、只箇柴頭煨火種……直截超宗炷炉与柴頭尽底無。

右の上堂の法語等は如来蔵思想的なものということが出来るであろう。柴頭に火種をうずみずみするというような簡単に云えば火と火種といったような考えがみられる。柴と火に類した問答は他にもみらるるところである。如来蔵と如来性、而

して如来性の顕現の仕方は一般とは少し異なるが結局はその現れである。

二、上堂、三分光陰二早過、遲日江山麗、靈台一点不楷磨、春風花草香、食生逐日区去、泥融飛燕子、喚不回頭爭奈何、沙暖睡鴛鴦、靈台、食生逐日、喚不回頭等如来性や煩惱蔵、断道の境界等を説くものであろう。

三、四月八日上堂、雲開山嶽露、雨過色新鮮、

四、中秋上堂、雲散秋空、即心見月、家家門前照明月、処処行人共明月

諸方禪を説き、清涼は詩を念うといわれる通りの如浄禪師であるから説かることが詩的であつて、仲々難解ではあるがそこから宗教的、思想的なものとして受取れば、山嶽や雲新鮮な色や雨、開や過とか月や雲等如来性や煩惱、断道等と意味づけすることができる。

五、臘八上堂、六年落草野狐精、跳出渾身是葛藤、打失眼睛無覓処、誑人剛道悟明星。

臘八上堂の法語であるから当然のことであるが落草野狐精とか渾身是葛藤等の煩惱蔵の入門が出され、跳出、打失眼睛等の断道、無覓処等如来性が出されている。宗教的体験の経過的説明としてこの思想はごく自然のものと考えられる。

六、冬至上堂、昨日一線短、今朝一線長、針眼裡過、尺寸上量、短長齏割断、巧綉出鴛鴦、還見我見人見衆生見寿者見最

親見、

七、十月朔一書記至上堂、二由一有、一亦放下擊弘子一下、云、然後向者裡拈起、謂之納僧火柴頭、

六、の長短等の相對、短長齏割断等煩惱、断道等であらうし、七、の二一の相對や一亦放下等六、と同じ意味のものであろう。

八、謝知事上堂、打破黑漆桶、十方空豁豁、

九、忽然爆破漆桶、豁如雲散秋天

黑漆桶を打破することは何回も如浄禪師のとかかるところで、黒漆桶を打破した断道後の如来性での生活は十方空豁豁とか豁たること雲の秋天に散ずるが如しといわれるものであろう。

十、截断千差、单提一著、那边放下龜毛、者裡拈起兎角

千差、截断千差等通途の通りであるが那边放下龜毛、者裡拈起兎角の龜毛、兎角等仏教一般の語句が出てくることは珍しい。

十一、手欄馬廐、一拶透関、豁開宇宙、

宇宙、手欄馬廐、透関、豁開等いつもの通りである。

十二、打破虚空笑不休、大家徹底驗聾頭、

十三、眼裡抽釘腦後拔箭、本来無象通機變

同じ虚空にしても如来性としての虚空もあり煩惱蔵としての虚空もある。その虚空や十三、の釘、箭等打破、抜抽さるべ

きもの、その断の上に立つて本来無象の境涯にあるべきであろう。

十四、有問有答、屎尿狼藉、無問無答、雷霆霹靂、於此、眉毛慶快、鼻孔軒昂、直得、太地平沈、虚空迸裂、心念紛飛、如何措手、

法見法縛的な表現であるが、いふなれば第一義諦に立つて如来蔵思想的に表現したものといえるであろう。

以上煩惱蔵を断じて如来蔵の如来性を顕現する種類のものと思われものをみてきたのであるが以上の諸例で明らかなる如く仏教的禪的宗教体験を如淨禪師独特の詩の形に於て而も多く喩説を用いて如来蔵思想的に説き明かしておられるのを見るのである。

以上如来蔵、煩惱蔵、断煩惱蔵頭如来蔵の順序で如来蔵思想のと考えられるものを概観したのであるが、前にも一言した通り、如来蔵性的のもの、煩惱蔵性的のもの即ち如来蔵思想的のものであつて一般的形態の如来蔵思想でなく、強いていえば如来蔵思想的のものともいうことができるであろう。

二

仏性思想については前述の如く極めて僅少である。時節因縁仏性縁仏性義と趙州狗子仏性無ぐらいである。先ず時節因縁仏性

義は統語録に出ているところである。即ち、

時節因縁仏性義、共移靈棹渡頭舟、玉麟帶月離雲漢、金鳳銜花下彩樓

仏性の時節因縁義とでも解することができるであろう。涅槃經がすべてのものの本質基盤的動きを仏性を以てみているのと同じ意味のものであろうが共に靈棹を移して頭舟を渡り、玉麟月を帯して雲漢を離れ、金鳳花を銜んで彩樓に下るといふが如き仏性の時節因縁義と解すべきものである。ここでは一般に云わるる如き成仏の因としての仏性義でなく果上に見られた仏性義であろう。如淨禪師のお弟子である道元禪師も正法眼蔵仏性の巻で仏性義を詳説されるが之も根本的には現成の思想に立つ果上の仏性義でその仏性の意味するところは証の義であり証のいろいろの動きであるが如淨禪師に於ても根本的には同じようなものが見られるのであろう。

次に趙州狗子仏性無であるが、

趙州狗子仏性無、只箇無字鉄掃帚、掃処紛飛多、紛飛多処掃、転掃転多、掃不得処捺命掃昼夜竖起背梁、勇猛切莫放倒、忽然掃破太虚空、万别千差尽豁通

かくの如く趙州狗子仏性無の無字の公案である。この無字の鉄掃で掃くわけであるが、掃処は紛飛多いのであり、その紛飛多い処を掃くに転た掃けば紛飛転た多い掃不得の処を命を捺する覚悟で掃き、昼夜背梁を竖起して坐禪し勇猛にして切

に放倒しなければ忽然大虚空を掃破し無字の公案が通り万別千差の世界が豁通することになる無字の公案の宗教体験的経過的説示であろう。従つて仏性思想というよりもむしろ之を使つた無字の公案である。さき大慧、宏智両禪師の狗子仏性の話をみたが、宏智禪師は狗子仏性有、無で所謂仏性話であつたのに対し、大慧禪師は狗子仏性無で無の公案であつた。如浄禪師のここに出される狗子仏性無は大慧禪師と同じく無字の公案である。

以上の如く仏性思想については時節因縁仏性義や狗子仏性無等であるが後者は仏性思想とはいいがたいので仏性思想としては前者のみということになる。

如浄語録、続語録等にみらるる如浄禪師の如来蔵思想、仏性思想は大体以上の如きものであろう。

三

如浄禪師を伝えるものはその語録や続語録であるがその他に道元禪師によつて伝えられているもの即ち道元禪師の撰述の中にみられるものがある。正法眼蔵をみるとその九十五巻中如浄禪師のこの出てくるものが二十七巻位あり、その出る度数は重複等を考えても四十箇処以上あるようである。出るものはその語録等にもみらるるものが約半数位、語録等にもみられず眼蔵のみ見られるもの約半数ということができらるであ

らう。而してこの後者の内容をなすものは 1、坐禅や坐禅の生活についての教え。2、如浄禪師と道元禪師の両禪師間のみのこと、例えば面授嗣法のこと、参学了畢のこと、正伝のこと即ち如浄禪師から道元禪師への問題や如浄禪師の道元禪師のみへの説示、又道元禪師のみられた如浄禪師の宗教生活、行持とでもいわれるもの。3、如浄禪師の当代への、或は広く宋朝禅一般への批判というが如きもの等であろう。而してこの道元禪師が伝えられるものの中にもさきと同じようにその如来蔵、仏性等の一般的なものは見出せない。断道的なものとか如来性理のものとかは見る事ができる。而してこの場合は道元禪師を通してみられた如浄禪師、如浄禪師のいろいろのものということが出来る。之は語録にもあり眼蔵にもあるものであるから道元禪師を通して如浄禪師をみるものとして適當であるかも知れないが、眼蔵所出のものを通してみると、而も之は梅華の巻にも眼蔵の巻にも優曇華の巻にも三度も引かれるものであるが「先師古仏上堂示衆云、瞿曇打失眼睛時、雪裏梅華只一枝、而今到处成荆棘、却笑春風線乱吹」之を道元禪師は「且道すらくは、瞿曇眼睛はただ一二三のみにあらず。いま打失するはいづれの眼睛なりとかせん。打出眼睛と称する眼睛のあるならん」と打出眼睛を拈せられ、「さらにかくのごとくなるなかに雪裏梅華只一枝なる眼睛あり。はるにさきだちてはるのこころを漏泄するなり」

と華に喩説してその宗教經驗的展開を説示される（眼睛の卷）また「いま如来の眼睛あやまりて梅華となれり。梅華いま弥綸せる荆棘をなせり。如来の眼睛に藏身し眼睛は梅華に藏身す。梅華は荆棘に藏身せり。いまかへりて春風をふく、しかもかくのごとくなりといへども梅華衆を慶快す」（優曇華の卷）さきの眼睛と梅華が一如されている。梅華の卷に於ては全体的に拈せられる。まずこの上堂示衆の法語をうけて「いまこの古仏の法輪を尽界の最極に転ずる一切人天の得道の時節なり。乃至雲雨風水および艸木昆虫にいたるまでも法益をかうぶらずといふことなし。天地国土もこの法輪に転ぜられて活潑々地なり。未曾聞の道をきくといふはいまの道を聞著するをいふ未曾有をうるといふはいまの法を得著するを称するなりおほよそおぼろげの福德にあらずば見聞すべからざる法輪なり」と非常な感激を以て如浄禪師の説示をうけとられこの法輪法益を大地有情同時成道のな仏教の根本的基本的受取り方をされ而して古仏の法輪を尽界の最極に転ず……得道の時節として説示しておられる。道元禪師の拈提をうけて如浄禪師をうかがうとき深くその真意をくむことが出来るであろう。次に法語の拈提であるが「雪裏の梅華は一現の曇華なり……而今すでに雪裏の梅華まさしく如来の眼睛なりと正伝し承当す」これを拈じて頂門眼とし眼中晴とすとして打出眼睛との一如、承当、正伝の様子を詳しく説示され、尚すすんで

「正当恁麼時の見取は梅華只一枝なり。正当恁麼時の道取は雪裏梅華只一枝なり」ととかれ「而今の到处は……梅華而今の到处なり。而今の現成かくのごとくなる成荆棘といふ。大枝に旧枝新枝の而今あり。小条に旧条新条の到处あり云云」と、かくの如く打出眼睛、梅華、而今到处成荆棘等の喩説を以て仏教の宗教經驗の究極を説示された法語を道元禪師は仏教の全体的基本的立場に立つて懇切丁寧に拈提されるのである。この瞿曇打失眼睛時の法語は斷頭道の宗教體驗を表わすものと考えられるので之を取り上げ道元禪師の拈提を通してそれをみるとしたものである。次は如来性裡のものともいうべきものと思うが諸法実相の巻に出ているもの、之は眼藏のみにあつて語録等にはみえないようである。即ち「先師天童古仏、ある夜間に、方丈に普説するにいはく、天童今夜有牛兒、黃面瞿曇拈実相 要買那堪無定価 一声杜宇孤雲上 かくのごとくあれば、尊宿の仏道に長ぜるは実相をいふ。佛法をしらず、仏道の參学なきは実相をいはざるなり」としその時の様子をのべて「大宋宝慶二年丙戌春三月のころ夜間やや四更になりなんとす……ほのかに堂頭和尚の法音きこゆ……満衆たちかさなれり……ときに普説あり……大梅の法常禪師住山の因縁……靈山釈迦牟尼仏の安居の因縁……如今春間、不寒不熱、好坐禪時節也、兄弟如何不坐禪、かくのごとく普説し、いまの頌あり」とあるが之によつてこの談実相の

時節因縁等が察せらるるようである。「この夜は微月わづかに楼閣よりもりきたり杜鵑しきりになくといへども、静間の夜なりき」といわれる如き夜であつたようであるがその時の入室話も「杜鵑啼山竹裂」というのであるから、如浄禪師が孤雲上の杜宇の一声に宗教的感動感激を覚え無定偈の実相を大衆に説示されたものであろう。之を以てみても如浄禪師をはじめとして山門一同不眠不休坐禅しておられた様子がまことに随聞記に説示されている通りであり、如来性裡に行持せられた様子がよく察知せられるのである。如浄語録と正法眼蔵の双方にみらるる断頭道をとくと思われる瞿曇打失眼睛時の法語と正法眼蔵のみにみらるる諸法実相の巻に出る一声杜宇孤雲上の如来性裡の行持をとくとみらるる法語とを討尋して道元禪師の撰述中にみらるるものによつて、道元禪師を通して如浄禪師を見んとしたものである。

執筆者紹介(一)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|-----------|------------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|------------|-----------|----------|----------|----------|--------------|
| 加藤純章 | 柴田泰 | 島田外志夫 | 佐藤達玄 | 光地英学 | 刈谷定彦 | 小島文保 | 上山大峻 | 小川貫弍 | 新田雅章 | 渡辺宝陽 | 岡部和雄 | 田村晃祐 | 坂東性純 | 宮地廓慧 | 平井俊栄 | 平川彰 | 橋本芳契 | 石田充之 | 小川弘貫 |
| | | (北海道大学助手) | (東方研究会研究員) | (駒沢大学教授) | (駒沢大学助手) | (竜谷大学教授) | (竜谷大学助教授) | (竜谷大学助教授) | (中京大学助教授) | (立正大学助教授) | (駒沢大学講師) | (東洋大学助教授) | (大谷大学助教授) | (京都女子大学教授) | (駒沢大学助教授) | (東京大学教授) | (金沢大学教授) | (竜谷大学教授) | (駒沢女子短期大学教授) |

(二二頁につづく)